

---

# 守護者は遺跡と共に

気仙鏡花

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

守護者は遺跡と共に

### 【Nコード】

N8043I

### 【作者名】

気仙鏡花

### 【あらすじ】

ある冒険者たちの年代記。

## 序章 初めの始まり（前書き）

連載速度の遅さ、感想のご返事の遅れはご容赦ください。

## 序章 初めの始まり

日の出と共に暗さが和らいでいく空。

空の下には広い大地があり、その上には均されていない道路が走り、それに繋がる街や林がある。

林を抜けた位置に存在するのは朝露が光る広大な草原だ。

背丈の低い黄緑色の草木が不揃いに生えているそこに、二人の間が立っていた。

一人は黒の長衣と黒のズボンをまとい、煙草をくわえた青年。

もう一人は白の衣装を身にまとった少女だ。衣装はジャケットとスカート。その上からコートを羽織っている。そして彼女は左手に持ったレンチで、目の前にある自身と同サイズの機械を調整していた。

調整中の人型をしたその機械は、小さな駆動音を立てつつ淡く揺れる。

青年は明るくなってきた空を見上げ、口から煙を吐きつつ、

「おい、ディアナ・カツツエル。まだ動けないのか？」

「御免なさい、グランさん。もう少しかかります。ここで調整しませんと細かいモノを噛むかもしれませんので」

機械の隙間にレンチを差し込み何度か捻っていくディアナを見て、  
「……大体なんで君は自律装甲オートメイションなんて使いたがるんだ？ ただの装甲でさえ扱いきれないのに」

自律装甲をいじっていたディアナは手を動かしつつもグランへ顔を向け、

「いえ、折角あるものを使わないのもどうかと思ひまして。勿体ないじゃないですか」

その返答にグランは煙と共に吐息し、

「自分の命を預けるものを勿体ないとかで決めるなよ。これだから危険が増えるんだよな……」

嘆きともとれる眩きを耳に入れたディアナは、まあまあ、とグランを制し、

「一年間こんな調子でやってきて大丈夫だったのですから、結果オライということで」

笑みを持って行ってくるディアナに対しグランは呆れの視線で返す。

「まあ、それはともかく早く済ませてくれ。日が上がりきるまでには出立したい」

分かりました、との回答を得てグランはまた空を見上げた。

雲はそう多くなく、日がよく刺す良い天気になるだろうとは思っ  
が、

……何か、嫌な予感がするな。

そう心の中で思った時、

「あ」

不吉な声が聞こえた。

そして不吉な駆動音が聞こえる。それは調整中になっていたものと同種でありながら、しかし少しだけ変わったもの。

もはや確信に近い不安を持って音の方向をみると、ディアナの自律装甲が起立しており、さらには、

「ぼ、暴走しちゃいました　！」

ディアナの叫びと同時に、二十メートルの距離から自律装甲が一直線に突っ込んでくる。移動は高速。

……またこのパターンか。

これまでも何度があったことであるが、些か面倒なことだ。

本来戦闘用に作られた自律装甲のチャージは岩塊すら容易く砕くことができる。

避けることもできるが、追尾性を持っているため意味がないし、下手に動くと周りへの被害も心配される。なので、グランは行動した。

速度を持ってこちらに飛び込んでくる自律装甲とグランは相対し

た。

激突までの猶予は三秒無い。故に動きは迅速だった。

煙草を吐きだし、装甲に対して半身になり右足を腰辺りまで上げ、それと共に腰を回し、

「おおっ……！」

装甲の動きに合わせるように直蹴りで迎撃した。命中したのは頭。激突の衝撃に弾かれる様にして互いの体が吹き飛ぶ。

グランは空中で身を回しバランスをとりつつ着地した。

装甲は地面を転がりつつ立ち上がるうとするが、ディアナに背後コンソール部にある緊急制動ロックを作動されその動きを止めた。

吐き出された煙草が地面に落ちる音が聞こえるほどの静寂が辺りに広がる。

数瞬の気まずい沈黙の後、ふう、とディアナはわざとらしく息を吐き、

「いやー、失敗失敗。次からは気を付けましょう、自分」

「……もういいから捨ててこい、それ」

やや据わった目になっているグランを前にしたディアナは、

「い、いや次からはほんと大丈夫ですって。き、気を付けますから

！ いや、ほんと御免なさい。ほんと謝るからそんな怖い目をしな

いで……！」

## 序章 初めの始まり（後書き）

こんにちわ気鏡花です。

今作は適当娯楽小説といった形なので楽しんでもらえたら幸いです。

連載速度はあまり期待しないでください。

私自身、文を作る時間をあまりとれない状態に置かれていますので、感想を返すのが遅くなることが多々あると思いますが、そこは温かい目で見えていただけると有り難いと思います。

序章 初めの始まり(前書き)

追加1

## 序章 初めの始まり

二人は草原に行く。目的地は数百メートル先。

平らで、周囲を一望できるはずの草原に似つかわしくない物がそこには在った。

遺跡。直径一キロはくだらない巨大な建造物だ。

それは己の存在を誇示するかのように堂々と、草原の中心に佇んでいる。

いつ出来たのかは明らかではないが古い石のような外壁部、その所々に植物が巻いている。

新たな煙草をふかしたグランが遺跡の入り口まで辿り着くと、

「いつまで装甲を拭いているんだ、ディアナ・カツツェル。さつさと降りて、自分の足で歩いて来い」

彼が体を反転させ見たものは、自律装甲の額部分をクロスで吹いているディアナの姿だ。先ほどからずっとこの調子で、歩行は自律装甲に任せ自身は突き出された装甲の両腕に座っている状態だ。

彼女は自律装甲の額に付いた足あとを消しつつ、

「うう、私の大事な<sup>グラム</sup>GRAMが足蹴にされたんですよ？」

「知るかそんなこと。己の命を守るために仕方なくやったことでそんな責任を求めるような眼をされても困るというか、こうなったのはこれが初めてというわけではないだろう」

「何度やられても悲しいのは変わりませんよ……」

「やられたくなければ暴走させないようにすることだな」

吐息しながら言うと、嘆きを発しながらもディアナがGRAMの両手から降りる。

さて、とグランが言葉と共に場を仕切り直し、

「では、行くぞディアナ・カツツェル。……一応聞くが準備はいいか？」

自律装甲を背にあるバックパックに圧縮収納していたディアナは、

「もちろんですよ。ちゃんとたくさん回復アイテム持ってきましたから！　しっかり勉強したんですよ？」　RPGで

ポーズ付きで決めるディアナをグランは冷静に半目で見つっ、ついでに少々憎しみを抱いたので軽く彼女の額を小突き、

「本物の冒険者が冒険ゲームで勉強するな。君は一応一年間の経験があるだろうが。　常に逃げ回っていたただけだが」

二度三度小突き回しつつ言うと、

「あ痛たた。し、仕様が無いじゃないですか！　まだ上手く扱えないんですから」

やれやれ、と肩を竦め吐息するグランは額を手で押さえるディアナと、背負ったバックパックに視線を当て、

……一応上級武装なんだがな、GRA-Mは。

本来一年あたりでは使いこなせないのは当たり前で動かすことすら難しい代物なのだが、ディアナは一月ほどで基本動作をマスターした。

……才能だな、これは。

天才とも呼ぶべきか。自分の持つ能力で全てをやり繰りしてきた己とは違う人種だ。

だが彼女はそれを自分で理解しきれていないのが困り所だ。無意識にこちらに依存してきている。

……若さ故、とでも言っておくか。

いつか独り立ちはしてもらいたいものだ、などと考えていると、右腕に淡い力が掛かった。それはディアナがこちらの袖を引いている事によるもので、

「グランさん？　どうしたんですか、そんなエロいものを遠方に見つけたからそれを凝視しているような顔をして」

「……君とは一度話し合う必要があるそうだな」

まあいい、とグランは自分で話を切り、

「準備が出来たのなら行くぞ。宝物探しに。迷いは無いか？」

「はい！」

ディアナの決意を確認し、遺跡の中へグランは入って行く。

今日は何が起きて何をしなければならぬのか。

面倒だと思いつつも彼は、出来る限りの対策を練って考えを巡らしていく。

自分の仕事を果たすために。

第一章 号砲代わりの敵対者（前書き）

追加二つ

## 第一章 号砲代わりの敵対者

遙か未来、世界は一度滅びを迎え、改変された。

人々は新たな技術、そして新たな人種と共に新たな世界で営みを始めた。

それらすべての根本におかれるのは、とあるモノの「発見」という出来事。

生体鋼。

広義の意味での生命を持つ金属だ。

当時の技術体系を完全無視するその存在は瞬く間に世界に広がり、瞬く間に世界を変えた。

そして、今に至る。これ以上改変する余地のないこの世界に。

否。改変出来ない訳ではない。現時点で実質的に不可能であるだけ。現在、それらを多少加工するだけの技術はある。

だがそれ以上のことは出来ない。

物質そのものを研究しても、現在では解明出来ない事、分からないことがあまりに多すぎたからだ。

故に現代が目をつけたのが過去。

滅びを乗り越えた者の意志が生きていた時代。そして彼らの遺物。

それらはこの

時代に形として残っている。

それが、遺跡。

遺宝をその内に秘めた聖域である。

それらの聖域を遺宝を求めて侵し彷徨い探る者達は、人々から尊敬と軽蔑を込められて冒権過アンダーローと呼ばれていた。

## 第一章 号砲代わりの敵対者

閉所での発音は長く重厚な響きを得る。

何重にも重なる蓮音が響くのは日の光が入らぬ、しかし確かな明るさを持った空間。

四方が壁で囲まれた、直方体上の石床の道だ。

天井には発光物が張り付いており、通路を照らしている。

鳴る音の正体は一つ。

皮と鉄で出来た履物が石床を叩くことによつて生じる足音だ。

音を発生源はただ二つ。

そして声という新たな音はその空間に追加される。

「へー、ここが第三階層ですか、　　つてちよつと置いてかないでくださいよグランさん！　足速すぎますつてば！」

バックパックを背負ったディアナがやや小走りになって己の先を行くグランを追っていくが、

「気にするな。君が遅いだけで俺の足は人並だ」

「論点ずれてますつて、それ。……というより何でそんな不機嫌顔なんですか？」

追いつき横に並んだディアナはグランの顔を覗き込みつつ言う。

対しグランは首を微かに傾け、彼女の眼を見て、

「ああ、本来ならここまで案内するのに半年も掛からないのに、どこぞの誰かが一、二階層であちこちにやたらと触り、畏を作動させまくってくれたおかげで無駄な労力と時間を使ったな、と思いつて反芻していたら苛立ち度が自然上昇してしまつてな。この気持ちをどうしてくれようか？」

煙草を揺らし煙を吐きながら淡々とこれまでの経緯を語るグランの、感情の全くこもつていない視線を受けたディアナは、

「そ、それはあれですよ！　豊かな人生経験の糧になるというか。失敗は成功の母つていうか！　それにこの頃は私全然そついうのに

引っ掛かってませんし、これでも成長したんですよ？ だからいいじゃないですか」

「最近の前もって俺が罖を片づけておいたのだがその事実すら気づかない事を成長と呼べるとはな。初めて知ったよく覚えておこう」

「そう言えばここしばらくは罖自体を見なかつたような……」

そのままグランの半目でにらまれ続けたディアナは

「い、いやあの、そ、そのー、………：御免なさい」

はあ、とグランは吐息して、次いで煙と空気を同時に肺に取り込みつつ、

「全く。俺はあくまで案内屋で世話係ではないんだぞ？ 金を貰っているからやっているものの、本来は君が気をつけるべきことだぞこれは。よく考えてから行動しろ」

その言葉にディアナは弁解するように、

「で、でもほら、あるじゃないですか。若い頃の苦労は買ってでもしろって諺が」

「……つまり苦労をかけていることを自覚しておきながらさらに俺に苦労をかけているのか。最悪だな」

「あ、ああ言えばこういう人ですね！？ そんなに私を苛めて楽しいですか?!」

「苛めるという単語を辞書で調べてみる。恐らく俺の方が被害者だから」

話は済んだとばかりにグランは視線を前に戻し先行を続ける。

ぶつぶつと文句を言いながらも彼は絶対に自分の前にいる。一年前からそうだった、とディアナは思い返す。

……多分、気遣いですよね……。

自分が先に行って危険な目に合うことの無いように。案内屋という職業故ということもあるだろうが、

……有り難う御座います。

自惚れる気はないが大事にしてもらっているという感覚がある。

文句を言いながらも彼が一年もの間自分のわがままに付き合っ

くれたのは事実なのだから。

考えていると不意に前に行くグランの足が止まった。

どうしたのか、と問う前に、緊の一字を持ってグラン前を向いた  
まま答えを發した。

「ほら、お出まじだぞ。君の武装のお仲間さんたちが」

## 第一章 号砲代わりの敵対者（前書き）

追加。いつかおきくらしいのペースで出来れば幸いですね。

## 第一章 号砲代わりの敵対者

「あんなのとうちのGRA-Mを一緒くたにしないでください！」  
ディアナの叫びが響く中、それはグランの目線の先に佇んでいた。  
己とほぼ変わらぬ体長を持つ鉄で出来た人。

否、人型をした何か。GRA-Mと同様の外殻をしており中は空洞。

「自立進化し、単独行動可能になった装甲騎兵、か」  
やれやれと呟きながら目の前の装甲達をグランは見る。

数は三。動きはバラバラだが顔付近にある視覚素子は皆一様にこちらを向いている。

面倒だ、とグランは思いつつも背後のディアナに意識をやり、

「ディアナカツツエルやるべき事は解っているな？」

「えっ！ た、多分……………」。

い、いえ、大丈夫です。冒険の経験値はたっぷりですから」

少々不安だがよし、とグランは内心で頷く。

彼は装甲達への警戒を解かぬまま

「三秒後に行くぞ」

背後のディアナに告げ返事を待つことなくカウントを始める。

装甲達はこちらに接近している。動きは緩やか。だが明らかな鋭い敵意を感じる事が出来た。

それでも、

……………三、二、一

焦ることなく数えていき、心中で零を唱えた瞬間、

「撤退ー！！」

肺にある空気を全て吐き出しての大声と共にグランはバックステップで装甲騎兵達から離れた。

さらに一度の深い呼吸の後、装甲に背を向けて走り出した。

加速を開始する中背後からの叫びをグランは聴いた。

「やっぱり逃げるんですかー!?」

「当たり前だ。というか君は何故スタートが遅れている？」

「合図しておいただろう!」

やや頬を膨らませて走りを開始したディアナは、

「今度こそ闘うのかと思っただんですよ!」

「今までの経験とやらはどうしたディアナ・カツツエル! 俺があいつら相手にまともに戦っている姿を見せたことなど無いだろう!」

「いや、まあ、そうですね…、たまには男らしく格好良く戦っても良いじゃないですか!」

石床に高速の響きを連打するグランは顔だけをディアナへ向け、

「馬鹿か君は。ここで大怪我でもしてみろ。治療費に救護運搬費、そして護衛費用も掛かる。」

そんな勿体無いことが出来るか!」

「何か格好良い理由があるんじゃないやなくて結局金ですか!?!」

「当たり前だ。金がなければ生活できん。」

そしてディアナ・カツツエル。もっと早く走れ。追いつかれるぞ!」

ディアナの背後には金属が軋む音を立てながら追いかけてきている装甲騎兵がいた。

「だから私はグランさんみたいな足をしていないんですってば!」

ディアナは声を張りつつも息が切れてきている。

……不味いな。このままでは逃げきれまい……。

この仕事を受けた以上、怪我をさせるわけにはいかない。自分はプロなのだから当然だ。

が、少女とはいえこの場で一人を背負って走り抜けるのは少々危険だ。

ならば、

「ディアナ・カツツエル、自律装甲を展開するまで何秒だ!」

「七……、いえ五秒下さい。それだけあれば少なくとも脚部だけはいけます!」

そうか、と頷いたグランは足に力を込め軽く跳び勢いを殺さぬまま反転する。

そして後ろから来るディアナと入れ替わる形で先に行かせ、己は装甲騎兵たちと相對する。

後ろへ回ったディアナは足を止め、背に負ったバックパックからGRA-Mを圧縮開放し、

「GRA-M部分開放！サブオープン接続コネクト……！」

自身へと自律装甲を纏い始める。

それを横目で確認しつつ、グランは自分の腰裏に括り付けてある物に手を伸ばす。

ディアナのバックパックと同じく圧縮収納可能なバックパックから取り出すものは、

「近接戦闘用長銃？アイゼンファウル？だ。改良したばかりで試射はまだだが、まあここでやっても異存は無いな」

グランは銀と白にカラーリングされた銃身を持つその銃を構え、

「弾は錬鉄。喰らってみるか？ 金属の体を持つ者たちよ！」

躊躇うことなく銃撃した。

**第一章 号砲代わりの敵対者（前書き）**

師走は忙しいのでー。

## 第一章 号砲代わりの敵対者

「起動者認定ディアナ“カツツエル”リインハルト」

自立装甲の展開は、自己認証から始まる。

装甲は己が主と定めた者のみに効果を発揮する。

背にあるバックパックから出した自律装甲は自身の足元で振動しながらその形を変えていく。

自分の足に蛇のようにまとわりつき、その金属はその部位を覆う。小動物に擦り寄られるようなくすぐったさを得つつ思うことは、

……全く、こっちも経験を積んでいきますのに……。

共に冒険して一年経ったというのにこちらを信用する素振りを全く見せない。

戦闘の力も宝物探知能力も危機感知能力……はおいておいて、ともあれ信用度が上がってもいい程度には実力が上がっている筈なのに、彼はある一定のこと以外は全部自分己だけでやろうとする。

今だって、前衛というか敵と相対するのはグランだけだ。

グラン自身はそちらの方が安心するのだろうか、

……もつ少しこちらを信じてくれれば。

ついでに自分にもっと優しくなってほしいともディアナは思う。

思えば出会ったときから酷い扱いを受けている気がする。

己の相方に対し不満を呟いていると、

「ロディンク同調率70パーセント」

脚部への装着が完了しようとしていた。

その時だ。

聞き覚えのある銃声を聞いたのは。

**第一章 号砲代わりの敵対者（前書き）**

二つ目一。

## 第一章 号砲代わりの敵対者

グランの指が引き金を絞った瞬間。

銃内で自動精製された弾丸は、豪速の一字を持って放たれた。

自身の左腕は久しぶりの反動に驚いたように跳ね、しかし震えを堪え切る。

向かう一撃は三体の装甲騎兵のうち真ん中の一体の額にぶち当たった。

金属同士が擦れ弾きあい、重い音が鳴る。

錬鉄製の弾丸は、ほぼ同硬度を誇る装甲騎兵の外甲を貫きはしない。

だがその慣性による打撃力は遺憾なく発揮され、

「……吹き飛ばす！」

言葉通りになった。

全身が金属製の人型は、勢いそのままに左右にいた二体を巻き込んで倒れた。

「……ふむ、連射機能を排したことで単発による打撃力が向上したか。……まあ上々だ」

呻きが終わると同時、

「接続完了」

ディアナの装備が完成した。

「……終わったか。なら今のうちに逃げるぞ」

その言葉にえー、とディアナは不満の声を上げ、

「今がチャンスじゃないですか！ ふらふらですよ？」

「本当に君は今まで何を見てきたんだ？ あれくらいでは大したダメージなど無いことを忘れたのか？」

見る、とグランは顎で装甲騎兵を指し示す。

ぎ、という軋みを立て 既にその身を起こし始めた金属を。

巻き込んだ二体には大した傷はなく、命中した一体の額にも凹み

が残るだけだった。そして起立したかと思うと、

「！ 走れ！ ディアナ・カツツェル」

「え！？ は、はい！」

一気に加速して来た。先ほどまでの緩やかな動きとは違う鋭利とも表現できる高速駆動。

それを確認するのは一瞬。即座にグランは引き金を絞る。打撃音。

またも装甲騎兵は額に衝撃を受ける。が、倒れない。脚部を屈伸させ上半身をそらし、威力を逃がして耐えきった。

そしてその装甲は少々の余韻を残して移動を再開する。

……学習能力か……。

彼らは機械の身で自律行動が可能になった者たちだ。それくらいは当然のごとくこなすだろう。

……久しぶりに見たがな。そこまで出来るやつは。

たった一発受けただけで対処できる存在は少ないのだが、と思いつつもグランは銃声を響かせ続ける。

先頭にいる初撃を受けた装甲だけでなく、その背後、左右に追隨している装甲にも弾をくれてやる。

腹と胸に直撃。

しかしその二体も先頭の一体と同じように対処した。そして同じように追隨を再開する。

次々放たれる弾丸は文字通り足止めにしかならないが、

……それでいい。

弾を放っているのはもとより時間稼ぎのためだ。

少々不安なディアナの装備時間を得るための。そして、

……逃走時間を得るためのものだ。

グランは耳で背後を確認する。

己が出す処所の音は無視し、GRA・Mの駆動音だけに集中する。

その特徴的な音は相対する装甲騎兵のそれとは違い、リズムを持った音楽に等しい。

まるでオルゴールを聞いているかのような駆動音は、今はかなり薄れていた。

それはすでにディアナがここから数十、もしくは百数十メートルほど離れたということだ、

……ここが潮時ということだ。

思うが同時、グランはアイゼンファウルを打ち抜きざまに腰元へ収納し、装甲騎兵に背を向けて走行を開始した。

銃撃が止んだことにより、装甲騎兵たちは己の動きを取り戻す。すなわち高速移動。

こちらが一步を踏んだ瞬間、彼らは既に背後へと迫っている。

その速度で追ってくるのは脅威だがディアナは既に追いつけない位置におり、ましてや騎兵以上の速力を持つGRA-Mを装着している。

ならば心配は無い。

……別の意味でもな。

装甲騎兵の手がグランの背に届く、刹那。

グランは足裏へ力を送った。

全力。

渾身ともいえるその力に石床は砕かれ、それでも脚部に反発力を返した。

加速する。

体は前に進み出る。

騎兵の手は空振り、そして届くことは無かった。

一步ごとに床を浅く砕き、自分の力の痕跡ともいえるものをグランは残していく。

狭い一本道で、風をその身に受けながらグランは前進する。

後ろを振り返ることは無い。

やがて加速は止まった。だが速度を保ったままの走りは止まらない。

己の背後に装甲騎兵を置き去りにしてグランは通路を駆け抜けた。

## 第一章 号砲代わりの敵対者（前書き）

お釈迦になっていたパソコン回復！。

新年早々愉快な状況に陥っていたわけですが、なにはともあれ今年もよろしくお願いします。

## 第一章 号砲代わりの敵対者

二人は三叉路の付け根にいた。

足にグラムをまとったディアナの呼吸は早く、

「はっ、はあ……。こ、ここまでくれば……」

肩で息をするディアナを前に、グランは新たな煙草をふかし始める。

「……これくらいで息を切らすなディアナ・カツツエル」

「だ、だって装甲装備で走ったんですよ!? 疲れるに決まってるじゃないですか! というか煙草常習者をこえて中毒寸前なのに息切れないグランさんがおかしいんですよ!」

不平を叫ぶディアナに対し、煙草を一息に吸い尽くしたグランは、「俺はいつも通り至って正常だ。そしてこれは煙草ではなく、香りを楽しむ禁煙用ハーブフルーツスティックだ。そこは間違えないように」

言ってグランは胸元から立方体状の箱を取り出す。

箱はカラフルに色塗りされており、果物の絵と煙草を擬人化したというわけのわからない棒人間と商品名?そ、そんなに……、す、吸っちゃらめええ?がプリントされている。

…… 毎度毎度思うが、この会社の方向性は一体何なんだろうか?

品質的にはこれが一番で些細な疑問で愛用を止める気にはならないが、やや微妙な気分ではある。

そうしてグランが軽度の心理的負担を得ていると、

「いやまあ、煙の匂いでなんとなく分かってましたけど、結局ニコチンとか少しはいつてるじゃないですか、それ」

「禁煙用なのだから仕方あるまい。それより今は君のことだ」

GRA・Mの上に座って休憩するディアナを見て、

「何度となく言ってきたが、これくらいで疲れていては下層に連れて行くことは出来ないぞ?」

分かってますよ、とややばやくように声を出すディアナだが、視線をこちらの目に合わせ、

「でも、私はこんなところで諦める気はありませんから」

その言葉にグランは頷き、

「ああ、分かってている。だからこそ、俺がここにいるんだ」

吸い殻となった煙草を握りつぶし、そして薄紙でくるんで腰元のポーチのごみスペースに捨てる。

……ポイ捨ては良くないからな。

思いながらグランは音を聴いた。細かい電子音が二回。それは耳につけた小型音信機が午前九時を知らせる音で、

……もうこんな時間か。

収納具から四角い厚紙の塊をとりだし、

「少しばかり休憩だ。これでも食ってる」

ディアナにそれを渡し、そしてポーチから同様のものを手にし包んでいる厚紙を剥ぐ。

そこに見えるのはクリームや切り分けられた果物が少し粗めの茶色のパンに挟まれたもので、

「フルーツサンド？ これはまさか……」

「ああ、経費の関係でもちろん俺の手作りだ。有り難く食べよ？」

そうですか、ディアナは数瞬の躊躇いの後ゆっくりとそれを口に運ぶ。

「……………しょっぱい？」

「塩パンだからな。疲労して汗かいた後には塩分と糖分を同時に摂取できて良いだろう？」

そう言っただけでも自作サンドを噛む。

熱を持った体を嚙下した冷たいクリームが冷却する。

……さすが冷蔵機能付き収納具。完璧な作動だ。

玉に誤作動して部屋の中にブリザードを巻き起こすのが傷だが、それを見なければ素晴らしい物である。

二年前にブリザードを起こしたときは本気で凍死しかけたが改良

により一年に一度ほどの頻度に低下しているので問題なしだ。

それはともかく今は第二の朝食の時間だ。

所々に際はあるが、常に光に満ちた遺跡内では時間間隔が狂う。故に時を知る小道具が必要であり、

……食事などで外界と時間を合わす必要が出てくる。

体調を崩さずに長時間探索する為には必要な技能だ。

思いながら時間調整の為の食事をしていると、

「何かと文句言いつつ、面倒見いいですよねグランさんって。遺跡内外問わずよく食事作ってくれますし、ケアも手慣れていますし、お母さん気質ありまくりですね？」

「それは誉めているのか？ 貶しているのか？」

「も、勿論誉めていますよ？」

「そうか、疑問系で返すほど誉めているのか。これは覚えておかねばな？」

「い、いや、その…。妙なこと口走ってすみませんでした」

半目の視線をディアナにぶつけつつ己の分を口に含んでいく。

己の分をゆっくり噛み締め、食事を終えたグランは、

「……休憩終了だ。さっさと行くぞ」

「ちよつ、ま、まだ食べてますよ!？」

「なら口に押し込め。階段は右の通路のすぐそこにある。降りながら胃に入れる」

言つてグランが向くのは三叉路における右の道。よく見れば分かるが通路の右手側に空洞がある。そこが第三階層に降りる為の階段だ。だがそこに至る通路は、

「? なんれあんふぁに暗いんれふか」

周囲の道に比べ右通路は圧倒的に光量が少なかった。視界は十メートルほどしか確保できない。

「さあな、仕様だろうよ。そんなことより口にものを入れたまま喋

るな。そして」

早くしろ、と口にする前に、口内のものを嚙下したディアナが、  
「まだ奥があるように見えますけど、階段を通り過ぎた道の先には  
何があるんですか？」

「……どうでも良いことを聞きたがるのは君の悪い癖だな。ディア  
ナ・カツツエル」

ディアナは、はは、と苦笑し

「すみません。でも気になるので。それにグランさん、いつも聞か  
ないと何も教えてくれないじゃないですか」

視線を通路の先に固定しているディアナを見て、

……本当にこの娘は……。

言っても聞かないとは正にこの事だろう。

こちらが何故言わないのかも分かっていないからなお性質が悪い。

「……あの先は一応行き止まりだ」

「一応ということはまだしつかり調べていないんですね？」

グランが肯定の頷きを返すと、

「じゃあ、調べに行きましょう」

……やはりか。

「……階段は既に見つけてあるのだが、行かなければ駄目か？」

「駄目ですよ。全部調べないと後悔するじゃないですか」

ディアナは飛び跳ねるように立ち上がり、右の通路へ向かった。

やはりこうなったか、とグランは内心で舌打ちする。

基本、遺跡内での探索は上下層に移動するための階段を見つける  
のが先決で、それさえ見つけてしまえば自分のような案内屋でない  
限り、下手に動いて調査を続行したりしない。

藪をつついて蛇を出すことになりかねないからだ。過ぎた好奇心  
は人を滅ぼすのだから。

彼女はそういった所にまだ配慮が及んでいない。

……俺のような存在があるからかもしれないが。

かと言って一人で放り出すことは出来ない。それは契約に反する。

どうするべきか、と考えていると、

「きゃあっ！」

通路の奥から声が聞こえた。

……今度は何だ……。

一度の見た限りではただの行き止まりで、罠の無いことも調べ、先ほど気配を探り誰もいない事を確認した。

故にディアナを一人にしても大丈夫と判断して放っておいたのだが、

……また得意のうっかりトラップ作動とかは勘弁してくれよ。

すべて確認したはずだが、見落としが奥に一つぐらいはあるかもしれない。

面倒だ、と思いつつもグランが声のした方向へ歩いて行くと、

「……何だ。これは？」

大きな空洞があった。

前回の確認ではただの壁であった箇所が規則正しい四角形で切り抜かれたような空間。

そしてその奥の暗闇に見えるのは、

「新しい下り階段ですよ、グランさん！」

満面の笑みをたたえて、どうだとはかりに胸を張ってこちらを見ってくるディアナ。

少々その頬を抓りあげてやりたい衝動が沸いたがなんとか堪え、

おもうことは、

……ちよつと待て。こんなところに隠し通路などあったか？

少なくとも前回には、否その前に来た時も見たことは無い。

だが、なぜか違和感がない。感じるのは、懐かしさとも言えないような感情と、

……焦り、か。

柄にもなく感情が高ぶっているようだ。自分自身で制御すること

が難しい。

自身の体に奇妙な現象が起きているのを確かめっていると、

「は、早く行きましょーよ！ 新発見ですよ」

待て、とグランが声を出すより速く、ディアナは暗闇へと入っていった。

視認できないほどの闇。しかし、ディアナの早く早くー、と現状を全く理解出来ない声の響きで彼女がすぐ近くで自分を待っていることが分かる。

グランはこめかみを抑え、それでも仕方ないとばかりに溜め息を吐きながら歩き出す。

「本当にあんたとそっくりだよ、セレネ」

## 第一章 号砲代わりの敵対者（後書き）

第一章終了！。

後で微調整するかもしれません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8043i/>

---

守護者は遺跡と共に

2010年10月12日07時09分発行